

本シンポジウムは、これまで、歴史 (History) の記述において見過ごされがちであった女性たちの視点や活動の「これまで」と「これから」に光を当て、芸術とジェンダーに関する多様な視点や実践を探究することを目的としています。

芸術は長い間、社会的・文化的な変革を推進する力として認識されてきましたが、ジェンダーに関する問題は依然として存在し続けています。また、ジェンダーの視点から芸術を分析することは、社会の多様性と包摂を理解する上で非常に重要です。シンポジウムでは、歴史的および現代的な芸術作品や芸術を支えてきた人々・仕組みを対象に、ジェンダーの視点からそれらがどのように表現され、影響を与えてきたかを考察します。幅広い事例を参照しながら、芸術とジェンダーの交差点における現代的な課題と可能性を考察し、また相互に知識と経験を共有する場を生み出す機会となることを願います。

This symposium aims to shed light on the "past" and "future" of women's perspectives and activities, which have often been overlooked in the writing of History, while exploring diverse viewpoints and approaches related to art and gender. Art has long been recognized as a force for driving social and cultural transformation, yet issues concerning gender remain persistent. Analyzing art through the lens of gender is vital for understanding societal diversity and inclusion. The symposium will examine how historical and contemporary artworks, as well as the people and systems that have supported art, have been expressed and influenced from a gender perspective. Drawing on a wide range of examples, we aim to explore contemporary challenges and possibilities at the intersection of art and gender. Furthermore, we hope this event will create an opportunity for participants to share knowledge and experiences with one another.

定員100名 事前申込制(先着順) 参加無料
QRコードまたは下記のURLからお申込ください。

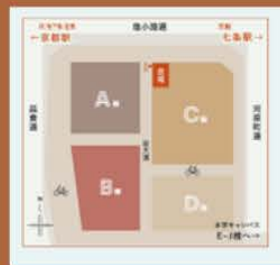
Capacity: 100 participants
Pre-registration required (first-come, first-served)
Free participation
Please register using the QR code or the following URL.
<https://forms.gle/DeFcP656dehopSzM8>



京都市立芸術大学講義室1 C棟1階

- ▶ JR・地下鉄「京都駅」駅前広場から徒歩約6分
- ▶ 近鉄「京都駅」から徒歩約10分
- ▶ 京阪電車「七条駅」1番出口から徒歩約10分
- ▶ 市バス「塩小路高倉・京都市立芸術大学前」下車すぐ

京都市立芸術大学芸術資料館
〒600-8601 京都市下京区下之町57-1
TEL.075-585-2008 FAX.075-585-2018
<http://libmuse.kcuu.ac.jp/muse/>



芸術とジェンダー 多様性と包摂の視点から Art and Gender: Perspectives on Diversity and Inclusion

国際シンポジウム INTERNATIONAL SYMPOSIUM

場所：京都市立芸術大学 C棟講義室1

言語：日本語、英語（逐次通訳または資料配布あり）

主催：京都市立芸術大学芸術資料館

協力：アダム・ミツキエヴィチ・インスティテュート

後援：ポーランド広報文化センター、日本ポーランド協会関西センター
フォーラム・ポーランド

※会場内誘導や座席などについて、特別な配慮を必要とされる方は、5月10日までに、京都市立芸術大学芸術資料館までご相談ください。 muse@kcuu.ac.jp

Venue: Kyoto City University of Arts, Building C, Lecture Room 1

Languages: Japanese and English (consecutive interpretation or distributed materials available)

Organizer: University Art Museum, Kyoto City University of Arts

Support: Adam Mickiewicz Institute, Polish Institute in Tokyo, Japan-Poland

Association Kansai Center, Forum Poland

※If you require special arrangements for guidance or seating, please contact us (muse@kcuu.ac.jp) by May 10.

京都市立芸術大学芸術資料館
芸術資料館web



京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts — founded in 1880 —



2025.5.17 - 5.18

プログラム PROGRAM

5月17日（土）13:00 – 17:40

13:00–13:10 ご挨拶

13:10–14:30 基調講演 1 小勝禮子「戦前～戦後の日本の女性画家をめぐる社会環境、教育、評価について」

14:40–16:10 基調講演 2 マルタ・スモリンスカ「マグダレナ・アバカノヴィチの『アバカン』—物質の触感和触覚の感覚—

16:20–17:00 発表 1 パヴェウ・パフチャレク「水玉を超えて：美術史における草間彌生の存在、不在、そして静かなる流用」

17:00–17:40 発表 2 加須屋明子「マリア・スタングレト＝カントルの位置づけと重要性」

5月18日（日）10:30-17:40

10:30–11:10 発表 3 牧田久美「上野リチの『ファンタジー』と多様な個の尊重」

11:20–12:00 発表 4 深谷訓子「ネーデルラント総督バルマのマルガレータと芸術保護」

13:00–13:30 「herstories—女性の視点でたどる美術史」展鑑賞

13:30–14:10 発表 5 中村翠「彼の／彼女の物語：小説『オーランド』（1928）から映画『オルランド』（1992）へ」

14:10–14:50 発表 6 赤松玉女「女性が女性を描くこと—京都市立芸大で紡いだ私のものがたり」

15:00–16:30 基調講演 3 アンナ・ボロヴィエツ「マグダレナ・アバカノヴィチのポズナンのタペストリースタジオ—自由と革命の空間」（※オンライン）

16:30–17:30 全体討論・質疑

17:30–17:40 おわりに

May 17 (Saturday), 13:00 – 17:40

13:00–13:10: Opening Address

13:10–14:30: Keynote Lecture 1 – KOKATSU Reiko, “Women Artists in Pre-War and Post-War Japan: Their Social Environment, Education, and Evaluation”

14:40–16:10: Keynote Lecture 2 – Marta SMOLIŃSKA “The ‘Abakans’ by Magdalena ABAKANOWICZ: tactility of matter and sense of touch”

16:20–17:00: Presentation 1 – Paweł PACHCIAREK “Beyond the Dots: KUSAMA Yayoi’s Presence, Absence, and Silent Appropriation in Art History”

17:00–17:40: Presentation 2 – KASUYA Akiko “The Position and Significance of Maria Stangret-Kantor”

May 18 (Sunday) 10:30-17:40

10:30–11:10: Presentation 3– MAKITA Hisami “Felice [Lizzi] RIX-UENO’s Fantasy and the Respect for Diverse Individuals”

11:20–12:00: Presentation 4 – FUKAYA Michiko “Margaret of Parma’s Art Patronage as Regent of the Netherlands”

13:00–13:30: Viewing of the Exhibition ‘herstories: Tracing Art History from Female Perspectives’

13:30–14:10: Presentation 5 – NAKAMURA Midori / His/Her Story : from the novel Orlando (1928) to the film Orlando (1992)”

14:10–14:50: Presentation 6 – AKAMATSU Tamame “A Woman Drawing Women: My story at Kyoto City University of the Arts”

15:00–16:30: Keynote Lecture 3 – Anna BOROWIEC “Magdalena Abakanowicz’s Tapestry Studio in Poznań - a space of freedom and revolution.” (※Online)

16:30–17:30: General Discussion & Q&A

17:30–17:40: Closing Remarks

略歴 BIOGRAPHY

赤松玉女 | あかまつ・たまめ

1959年兵庫県姫路市生まれ。1984年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻（油画）修了。相対する感覚が同時に存在し、複雑に絡み合う人間の内面をテーマに。絵巻、水彩、フレスコ技法など、画材や技法を組み合わせた絵画表現を研究。イタリアでの創作活動などを経て、1993年から京都市立芸術大学美術学部美術科教授（油画）。1990年代には3人のアーティストのユニットでの活動や、2010年代には障害のある人々や家族、支援する人々と一緒にアートを通じた交流やサポートの実践を行った。2019年4月から2025年3月まで京都市立芸術大学学長。現在、京都市立芸術大学名誉教授。

アンナ・ボロヴィエツ

ポズナń国立美術館現代美術ギャラリーの学芸員。博士（人文科学）。美術史家、文学研究者。2014年–2017年、ワロツワフ現代美術館で准教授として勤務。マグダレナ・アバカノヴィチ芸術大学（ポズナń）のコレクション部門の責任者をとりもつこともあり、「ポズナńの芸術」と題した空間造形プロジェクトのキュレーターとして、ポズナń市内に設置された彫刻や彫刻作品のカatalog作成にも関わる。批評のおよび理論的なテキストの著者であり、「オブジェクト・空間」（ポズナń国立美術館、2019年）、「空間の形態：1960年代および1970年代のポズナńの野外彫刻」（ポズナń国立美術館、2020年）、「マグダレナ・アバカノヴィチ：私たちは縦横構造である」（ポズナń国立美術館、2021年）など、数多くの展覧会を手掛ける。

深谷訓子 | ふかや・みちこ

1974年栃木県生まれ。京都大学大学院博士後期課程・美学美術史学専修（2005年に博士（文学）の学位取得）。2001–2003年、オランダ、コトレヒト大学留学。原道立大学芸術文化学部准教授を経て、2013年、京都市立芸術大学美術学部教授に就任。専門は16、17世紀のネーデルラント美術、ヨーロッパ近世美術の南北交流など。著書に「ローマの髪型—「キモンとペロー」の図像表現」（京都大学学術出版会、2012年）、共編著「カレル・ファン・マンデル「北方国家列伝」注釈」（中央公論美術出版、2014年）など。近著論文に“Depictions of Dutch Ships in Dutch and Japanese Paintings of the Seventeenth and Eighteenth Centuries”, in *Thijs Weststeijn and Benjamin Schmidt ed., The Globalization of Netherlandish Art, Leiden and Boston: Brill, 2024* ほか。

加須屋明子 | かすや・あきこ

1963年兵庫県生まれ。京都大学大学院博士後期課程専攻取得後期退学（美学美術史学専攻）。ヤギエウ大学（クワフカ、ポーランド）哲学研究所美学研究奨留学。国立国際美術館主任学芸員を経て、2018年より京都市立芸術大学美術学部教員（総合芸術科）。博士（文学）。専門は近・現代美術、美学。主な展覧企画は「芸術と環境」1996年、「死の劇場—カントルのオマージュ」2015年、「セレブレーション：日本ポランド現代美術展」2019年など、2011年–2020年龍野アートプロジェクト芸術監督。2022年よりたつのアート実行委員会代表。著書「現代美術の場としてのポーランド—カントルからの継承と変容」（創元社、2021年）、「ポーランドの前進美術」（創元社、2014年）、編著書「芸術と社会」（中央公論美術出版社、2024年）など。

小勝禮子 | かつ・れいこ

1955年埼玉県生まれ。近現代美術史、ジェンダー論、英米女子大学、京芸芸術大学非常勤講師、元・栃木県立美術館学芸部長、企画開催した主な展覧会に「奇る女たち—女性画家の戦前・戦後—展（2001年）、「術の女性1950–1975」展（2005年）以上、栃木県立美術館、「アツアツをつなぐ—展覧会を生きる女たち1984–2012」展（福岡アジア美術館ほか、2012–13年）ほか。共編に、青川博・小勝禮子「記憶の網目とたぐえる—アートとジェンダーをめぐる対話」（彩流社、2007年）ほか。2023年「さいたま国際芸術祭2023」市民プロジェクトとして「Women’s Lives 女たちは生きている—病い、老い、死、そして再生」展のキュレーションを担当。https://womenslives.mystrikingly.com/ アジア女性アーティストのウェブサイトを管理・運営 https://asianw-art.com/

牧田久美 | まきた・ひさみ

京都市立芸術大学芸術資源研究センター客員研究員。博士（美術）。1972年からテキスタイルデザイン牧田久美主宰。財団法人日本繊維産業センター第15回、第16回繊維デザインコンクール、銀賞、金賞。その他受賞・個展開催等多数。2014年京都市立芸術大学美術研究科修士課程修了、同大学美術研究科博士（後期）課程入学。2018年京都市立芸術大学美術研究科博士學位取得。2021年「キモノ図案からプリントデザインへ—GHQの繊維産業振興政策—」を思文閣より出版（単著、全368頁）。2022年度DNP文化振興財団グラフィック文化に関する学術研究助成に「教育者としての上野リッ—戦後デザインへの影響—」が採択され2023年より運用開始（〜2024年12月）。

中村 翠 | なかむら みどり

2006年ジュネーブ大学にてDEA取得。2012年パリ第三大学ソルボンヌ・ヌーヴェルにて、博士号取得。2013年〜2015年名古屋商科大学で教授をとつた。2015年から京都市立芸術大学に着任。フランス自然主義文学を専門とし、近年はアダプテーション研究にも関心を持つ。主な研究業績としては、「Destin des personnages secondaires du roman au théâtre : L'exemple de la reine Pomaré dans Nana」（Lire Zola au XIXe siècle, Classique Garnier, 2018）、「自然主義小説のアダプテーション—舞台、そして映画へ」（リアリズム再考：繪巻術における「現実」概念の交叉と構想）：松井昭英編、三元社、2023年）などがある。

パヴェウ・パフチャレク

文学博士（大阪大学）。キュレーター、美術評論家。時にパフォーマー。アダム・ミツシェヴィチ大学（オズナ）日本学攻修士課程修了（2012年）。大阪大学で博士号取得（2021年）。2021–2023年、日本学術振興会の外国人特別研究員、多摩美術大学特別研究員を経て、2025年より早稲田大学高等研究員講師。草間彌生研究、比較文学、美学、美術史の現代的問題に焦点を当て、社会関与の美術活動や、フェミニズム、クィア・スタディーズなどを研究。2017年よりアダム・ミツシェヴィチ・インスティテュート日本担当。主な著書「中絶・東欧の文化事典」丸書出版、2021年（分冊執筆）、「Kusama Yayoi czyli obsesja kropki」Tako、2015年

マルタ・スモリンスカ

マグダレナ・アバカノヴィチ芸術大学（ポズナń）教授、芸術学、キュレーション戦略、美術史を教える。キュレーター、美術評論家、ノマド、境界者、ポーランドAICA（国際美術評論家連盟）メンバー。2003年、ポズナńで博士号取得。同年から2014年まで、ニコラウス大学（トルン）准教授。2013年に教授資格取得。2014年ミューゼウム大学（LMU）フロッロ。2015年ベルリンのフルハイム。2018年と2021年DAAD奨学金を受け、ミュンヘン大学および自由大学で研究に従事。20世紀後半の非具象絵画、判断可能性、ボーダーランド、トランスメディア性、触覚性を研究対象とする。主な著書：「Re-Orientations. Contexts of Contemporary Art in Turkey and on the Road」（ブルジュ・ドグラマチとの共編、Kadmos、ベルリン、2017年）。「Haptyczność poszerzona. Zmysł dotyku w sztuce polskiej drugiej połowy XX i początku XXI wieku」（拡張された触覚—20世紀後半から21世紀初頭のポーランド美術における触覚）（クラクフ、2020年）など。

AKAMATSU Tamame

Born in Amagasaki, Hyogo Prefecture, in 1959. Graduated from the Master’s Program in Oil Painting at the Graduate School of Fine Arts, Kyoto City University of Arts, in 1984. Her research focuses on the inner world of humans, where conflicting emotions coexist and evolve in complex ways. She combines painting techniques such as oil painting, watercolor, and fresco. After engaging in creative activities in Italy, she became a professor in the Oil Painting Department at the Faculty of Fine Arts, Kyoto City University of Arts, in 1993. During the 1990s, she collaborated as part of an artist trio, and in the 2010s, she promoted communication and support through art with people with disabilities, their families, and supporters. She served as the president of Kyoto City University of Arts from April 2019 to March 2025. She is now Professor Emerita at Kyoto City University of Arts.

Anna BOROWIEC

Curator and custodian at the Gallery of Contemporary Art of the National Museum in Poznań, holds a PhD in humanities. She is an art historian and literary scholar. From 2014 to 2017, she worked as an assistant professor at the Wrocław Contemporary Museum. She served as the Head of the Collection Department at Magdalena Abakanowicz University in Poznań. She was also the curator of the spatial forms repository project “Art of Poznań”, which catalogs sculptures and sculptural objects located throughout the city of Poznań. She is the author of critical and theoretical texts and has curated numerous exhibitions, including “Object – Space” (National Museum in Poznań, 2019), “Forms in Space: Poznań’s Outdoor Sculpture of the 1960s and 1970s” (National Museum in Poznań, 2020), “Magdalena Abakanowicz: We Are Fibrous Structures” (National Museum in Poznań, 2021) etc.

FUKAYA Michiko

Born in 1974 in Tochigi Prefecture. Ph.D. (Kyoto University), associate professor at Kyoto City University of Arts, formerly associate professor at Onomichi City University (2006–2013), has researched on the Netherlandish paintings, art theory in the seventeenth century, and artistic exchange between the East and the West. Her publication includes “Depictions of Dutch Ships in Dutch and Japanese Paintings of the Seventeenth and Eighteenth Centuries”, in *Thijs Weststeijn and Benjamin Schmidt ed., The Globalization of Netherlandish Art, Leiden and Boston: Brill, 2024*; *Karel van Mander’s Views of Netherlandish and German Painters, Translation with Annotation* (in Japanese), Tokyo: Chuokoron-Shinjuu, 2014 (with A. Ozaki et al.); *Caritas Roma: Iconography of Cimon and Piro in Renaissance and Baroque Paintings* (in Japanese), Kyoto: Kyoto University Press, 2012 and many other articles.

KASUYA Akiko

Born in 1963 in Tatsuno City, Hyogo Prefecture. Completed doctoral coursework without degree at Kyoto University Graduate School (specializing in aesthetics and art history). Studied at the Department of Aesthetics, Institute of Philosophy, Jagiellonian University (Krakow, Poland). After serving as Chief Curator at the National Museum of Art, Osaka, she is currently a Professor at the Faculty of Fine Arts, Kyoto City University of Arts. Holds a Ph.D. in Literature. Her research focuses on modern and contemporary art and aesthetics. Major exhibition projects include Art and the environment— from an ecological point of view (1996), Theatre of Death – Homage to Kantor (2013), and Celebration: Contemporary Art from Poland and Japan (2019). Served as Artistic Director of the Tatsuno Art Project from 2011 to 2020 and has been the Chair of the Tatsuno Art Executive Committee since 2022. Publications include Poland as a soil for the growth of Contemporary Art: Heritage and Transformation from the Kantor to present day (Sogensha, 2021), Polish Avant-garde Art (Sogensha, 2014), and the edited volume Art and Society (Chuokoron-Shinjuu Shuppansha, 2024).

KOKATSU Reiko

She is an art historian and an art critic, former chief curator at Tochigi Prefectural Museum of Fine Arts. Her specialties are modern and contemporary art history and gender studies. She lectures in the Asian Women’s University, the Kyoto University, of the Arts. She was in charge of a number of exhibitions that discovered and re-evaluated modern and contemporary women artists in Japan and other parts of Asia, including Japanese Women Artists before and after World War II, 1330s–1950s (2001), Japanese Women Artists in Avant-garde Movements, 1950–1975 (2005) and Women in-Between: Asian Women Artists, 1984–2012 (2012–2013), all of which were held at Tochigi Prefectural Museum of Fine Arts. She also curated Women’s Lives, Disease, Aging, Death and Return at Saitama Triennale 2023 as Civic Projects in 2023. From 2020 to present, she manages the website Asian Women Artists: Gender/History/Border. https://asianw-art.com

MAKITA Hisami

Visiting Researcher, Art Resources Research Center, Kyoto City University of Arts. Ph.D. in Fine Arts. Since 1972, she has been leading the textile design studio MAKITA Hisami. Awarded the Silver and Gold Prizes in the 33rd and 11th Textile Design Competitions organized by the Japan Textile Design Center Foundation, respectively. Has received numerous awards and held many solo exhibitions. Completed the Master’s Program at the Graduate School of Fine Arts, Kyoto City University of Arts, in 2014, and subsequently enrolled in the Doctoral Program (latter term) at the same university. Earned a Doctorate in Fine Arts from the Graduate School of Fine Arts, Kyoto City University of Arts, in 2018. Published the single-authored book “Transformation of Traditional Kimono Designs into Western Style Print Designs in the Post-War Period—With a Focus on the GHQ Policy of Revival for Textile Industry” (288 pages) with Shibunkaku Publishing in 2021. In 2022, the research project “RIZ-UREO as an Educator: Her Influence on Postwar Design” was selected for academic research funding on graphic culture by the DNP Foundation for Cultural Promotion, with implementation beginning in 2023 and continuing through December 2024.

NAKAMURA Midori

NAKAMURA received her DEA from the University of Geneva in 2006 and her PhD from the Université Paris III Sorbonne Nouvelle in 2015. After teaching at Nagoya University of Commerce and Business from 2013 to 2015, she joined Kyoto City University of Arts in 2015. Her primary research focuses on French naturalistic literature, with a secondary interest in adaptation studies. Her main publications include “Destin des personnages secondaires du roman au théâtre : L'exemple de la reine Pomaré dans Nana” (Lire Zola au XIXe siècle, 2018); “Adaptations of the Naturalistic Novel: to the Stage and to the Cinema” (Réalismes revisités: croisements et entrecroisements de la notion de “réalité” dans les arts, 2023).

Paweł PACHCIAREK

PhD in Literature (Osaka University). Curator, art critic, and occasional performer. Completed a Master’s degree in Japanese Studies at Adam Mickiewicz University (Poznań, Poland) in 2012 and earned a PhD at Osaka University in 2021. From 2021 to 2023, he served as a Special Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science and as a Special Research Fellow at Tamu Art University. From 2024 he is an assistant professor at Waseda University. His research focuses on contemporary issues in comparative literature, aesthetics, and art history, with particular emphasis on socially engaged art, feminism, and queer studies, in addition to his studies on KUSAMA Yayoi. Since 2017, he has been in charge of Japan-related activities at the Adam Mickiewicz Institute. Major publications include contributions to The Encyclopaedia of Central and Eastern European Culture (Maruzen Publishing, 2021) and Kusama Yayoi czyli obsesja kropki, Tako, 2015).

Marta SMOLIŃSKA Prof. Dr. Habł.

SMOLIŃSKA teaches art theory, curatorial strategies and art history at the Magdalena Abakanowicz University of the Arts in Poznań (Poland). Curator and art critic, nomad and border crosser. Member of Polish Section of AICA, 2003 doctorate in Poznań, 2003–2014 assistant professor at Nicolaus Copernicus University in Toruń, 2013 Habilitation, 2014 Fellow at LMU München, 2018 DAAD scholarship holder at the LMU München and the Zentralinstitut für Kunstgeschichte in Munich, 2021 DAAD scholarship holder at the Free University of Berlin. Research on non-representational painting of the second half of the 20th century, illegibility, border art, transmediality and haptics. Books: “Re-Orientations. Contexts of Contemporary Art in Turkey and on the Road” ed. by Bircu Dogramaci and Marta Smolinska, (Kadmos) Berlin 2017; “Puls szuki (The pulse of art)”, Poznań 2010; “Haptyczność poszerzona. Zmysł dotyku w sztuce polskiej drugiej połowy XX i początku XXI wieku” (Extended Haptics. The Sense of Touch in Polish Art of the Second Half of the 20th Century and the Beginning of the 21st Century)”, Kraków 2020.